

成長が実感できる体験活動

case.06

地域社会とのパイプ役、
高校生社会体験交流センターを
生徒が事務局となり運営

新潟県立松代高校

School Data

1948年創立／普通科／生徒数
233人(男子123人、女子110人)
／進路状況(2012年度実績)大学
26.6%、短大5.1%、専門学校46.8
%、就職20.2%、その他1.3%

松代高校では、キャリア教育を推進する新潟県のオンラインワンスクール・ステップアップ事業の採択を受け、「まつだい高校生社会体験交流センター」を開設。この事務局の運営をすべて生徒にまかせることで、社会性やコミュニケーション能力、キャリア意識の形成促進を目指している。

大きな特色は「社会体験交流センター」の各部門を会社組織のように営業課、二課といった名称にしたこと。会社の「員として」かわかることで社会人の疑似体験ができ、かつ責任感も芽生えたと期待した。営業課は、1年生の職業講話に来てもらう講師の選定と依頼、2年生のインターンシップ先の開拓と受け入れ交渉を担当。ちなみに24年度は100カ所あまりの候補企業から2年生の希望を踏まえたくて27カ所の受け入れ先を開拓している。営業二課はメンバーの名刺や名札を作成したり、2年生にインターンシップ先の希望調査を行い、それを一課に伝え、マッチングを図ったりする。さらにインターンシップ先への依頼状、御礼状の作成・発送も請け負っている。交流課は、社会福祉協議会

や松代支所に赴き、イベントやボランティアの情報収集、そのつど校内に募集をかけて活動への参加を促す。広報課は学内向けの広報新聞の発行にあたっている。

特に営業課と交流課は、地域の企業や自治体の人たちと直接交渉にあたる部署。それだけに最初は戸惑う生徒も多かったが、電話対応や打ち合せを繰り返すうちにマナーや敬語、基礎対応力を着実に身につけていったという。事実、対応企業からは「高校生を見直した」と評価され、インターンシップの受け入れ先や就職先の開拓がスムーズになったというのが実感だ。

また、日々の仕事への取り組み方から、責任感や粘り強さ、対人対応力、事務処理能力など各生徒の能力を把握でき、本人の適性を考慮した進路指導ができるようになったそうだ。

24年度は3年生の就職希望者からメンバーの募集をかけ、採用試験を実施したが、25年度は生徒の自主性を尊重すべく、全校生徒から募った。やる気のある子たちを牽引力にして部活動のように活発化させたことを考えてのことだ。採用面接試験は地

域の有識者と24年度のメンバーに依頼。その結果、今年度は計28人のスタッフがそろった。「昨年以上に積極的に活動を展開し、社会体験交流センターのことを学内および地域全体にもっと広めていきたい」というのが事務局スタッフ全員の願いだ。

実践のヒント 進路指導部

生徒たちの自主性を尊重し、まかせてしまおうのが一番です

◎今年度の改善点は？

昨年度は生徒だけで企業へ行かせることが心配で、教師もなるべくフォローするようにはしていたのですが、生徒が実際に動き、失敗することも大切と考え、今年度は完全にまかせることにしました。通年型のインターンシップを実現したいと生徒が言っているので、その仕組みづくりをしたと考えています。(進路指導部 大行弘道先生)

◎生徒の変化を感じますか？

教師の誘いでメンバーになったものの、最初はやや消極的だった生徒がいました。ところが活動を通して自信をもつようになり、途中から先頭に立って仲間を引っ張り、「この仕事をやるのは自分しかない」と家に持ち帰って作業するようにまで成長しました。各課の会議も回を重ねるごとに発言が多くなっていますし、進め方もスムーズになっています。授業では見せない能力を発揮する生徒もいておもしろいですよ。(進路指導部 祝政弘先生)

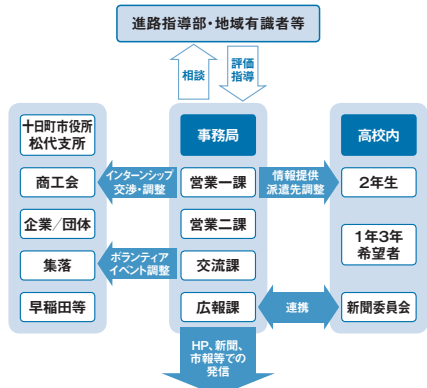
◎生徒主体の企業開拓のメリットは？

以前はインターンシップ先もハローワークまかせだったので10社ほどに限定され、生徒のニーズとマッチしていませんでした。でも、交流センター発足以降はニーズにも合うようになってきています。生徒が交渉に当たったほうが企業の承諾も得やすい気がします。(進路相談支援員 兼松芽永先生)



生徒は自分たちの名刺を持って、企業へ出向き、インターンシップ受け入れの交渉と調整を行う

組織図



社会体験交流センターの組織図。「早稲田等」とあるのは、学校近くに同大学のセミナーハウスがあるため、進路にかかわるさまざまな連携、協力をお願いしているそう

成長が実感できる体験活動

case.08

「産業社会と人間」における
さまざまな人との交流体験が
生徒の考える力を育む

神奈川県立 大師高校



12月の事業所・施設見学インタビューのひとつ(京急電鉄の神奈川新町検車区にて)

神奈川県初の総合学科高校である同校は、立地する川崎市南部の地域特性を考慮し「平和・人権・環境・福祉・国際理解教育」を設立の理念とした。1年次「産業社会と人間」、2年次「総合学習」、3年次「課題研究」を中心に100近くの総合選択科目でキャリア教育を推進している。産業社会と人間では、体験的学習を多く取り入れている。4月の「ふれあいキャンプ」ではカレー作りやコミュニケーション体験をしながら新しい出会いを体験。5月にはLGBT※の社会的理解を深める活動をする早大公認サークルが来校。グループに1人LGBTの人が入ってディスカッション

「産業社会と人間」
年間授業計画

<p>単元1：新たな出会いから学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> 産業社会と人間 オリエンテーション ふれあいキャンプ(マザー牧場) ふれあいキャンプふりかえり
<p>単元2：ともに生きる社会について考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> 早稲田大学サークル【Re.Bit】との交流 沖縄に関する学習 交流体験 事前学習 交流体験 交流体験振り返り 発表
<p>単元3：大師高校でどんな学びを選んでいくか</p> <ul style="list-style-type: none"> 個別ガイダンス(夏休み) 科目選択ガイダンス 履修計画
<p>単元4：職業・働くことについて考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> 職業についてもっと知ろう①【求人票の見方】 職業についてもっと知ろう②【働き方のスタイルの違い】 事業所・施設見学インタビュー 事前指導 事業所・施設見学インタビュー 事業所・施設見学インタビュー振り返り 発表
<p>単元5：1年間のまとめと進路</p> <ul style="list-style-type: none"> 進路を考える 1年間のまとめ 1年間のまとめと自分の進路 産人文集作成 産人意見発表会

ンをする。「自分には偏見があった。人を好きになることに変わりはない」という感想をもつ生徒も多い。
6月の「交流体験」も平和・人権・環境・福祉の問題を考えるためのもの。障がい者施設や保育園、外国人店舗、平和館、地下壕、干潟館といった場所を3〜20人に分かれて訪問し、さまざまな立場の人々と交流。
12月の「事業所・施設見学インタビュー」では会社や工場、建設現場、ホテル、病院、ハローワーク、動物園といった場所に10〜15人程度ずつ訪問し、インタビューも行う。以上について事前・事後指導もしっかり行う。この教科を担当するのは1年次の

School Data

1983年創立、1996年に総合学科に改編 / 総合学科 / 生徒数734人(男子332人、女子402人) / 進路状況(2012年度実績)大学15%、短大6%、専門学校32%、就職22%、その他25%

担任、副担任の計16人の教員。毎回、全員で打ち合わせを行い、授業内容の共有化を図ると共に切り口はクラスの状況や教員の個性で工夫していく。

実践のヒント

昨年度初めて担任を受けもった
1年次の先生方

「職業」と大人の「生き方」の
ホンモノ体験です

体験学習で生徒は変わりますか？

産業社会と人間を本校は「産人」と呼んでいます。生徒に教科の目的を説明する時、産人だけでなく、働く人に目を向けるようにと、「産人は「サンキュー人間！」という意味だよ」と伝えました。授業のたびにそう言い聞かせたからか、生徒も変わって来ようと思います。最後に授業の感想を書いてもらった時、とても感動的でした。この1年で学んだことや感じたことを、こちらが思ったより多く感じました。この脈絡をつけて親への感謝の気持ちやお金

の大切さとして示したり、自分の境遇を客観的に見られるようになったり、ずいぶん成長するものだと感じました。(松井浩気先生)
この1年間を振り返って、ふれあいキャンプが一番印象に残っているという生徒がかなりいます。でも、最初は行くのが嫌だったという子ばかりで、行ってみたら話したことのない子と話せて、それがうれしかった。そこからさまざまな体験を重ね、いろいろな大人たちと出会い、徐々に自分が開かれていって、自分なりの職業観がもてるようになった生徒が何人もいます。また、やっぱりだいたいの生徒が福祉施設に行き、自分と違う人の存在を認めるという気持ちを持ち帰り、勉強の苦手なクラスメートを急に教え始めたといったこともありました。人とのふれあいは人を変えるということを生徒から学びました。(吉田真弓先生)
「実感して考える」、これが産人の目的だと私は生徒に説明してきました。現場に行つて初めてわかることがあり、気づくことがある。そう思いながらさまざまな体験をしてほしい。実際は生徒より私のほうが発見が多く、私のほうがこの授業を満喫したかもしれません。最後の授業で「産人に答えはなく、自分の中で答えを探す授業だった」と感想を述べた生徒がいました。さまざまな体験を通じてそのような気づきを得て、自分の頭でものを考えられるようになった生徒が多かったように思います。(石山喜章先生)

※レスビアン(女性同性愛者)、ゲイ(男性同性愛者)、バイセクシャル(両性愛者)、トランスジェンダー(性転換者)の人々をまとめて呼称する頭字語

case.09

民泊を中心とした
体験型の修学旅行を実施。
見知らぬ人との交流が財産に

埼玉県川口市立川口総合高校

School Data

1929年創立／総合学科／生徒数
837人(男子309人、女子528人)
／進路状況(2012年度実績)大学
44.0%、短大12.0%、専門学校
24.0%、就職10.0%、その他10.0%



現地到着後、自分が泊めてもらう先の家族と対面。今回は各自が手作り写真立てを持参。中に写真も入れてホストファミリーにプレゼント。地元の方々に喜んでもらえた



民泊先では、その家の子どもとして見なされるので、お手伝いも当たり前。生徒たちは積極的に手伝い、その場の雰囲気を楽しんでいるようだった

注意事項(民泊)

キー	なし
服装	外に出るときはスポーツシューズ
貴重品	自己管理
アメニティー	全て持参 (ドライヤーは同時に2台以上使わないこと)
注意事項	・積極的にコミュニケーションを心がける ・食事の準備や片付けを手伝う ・奉仕活動をする ・冷蔵庫の使用や充電は民家の方に申し出る
室長会議	なし
非常時	民家の方の指示に従う
行動	建物から出ない 22:00以降は部屋から出ない
ゴミの分別	民家の方に聞く

民泊先での宿泊時の注意をまとめたもの。きめ細かくどのように対応すればよいか記載。民泊での徹底のかがあり、3泊めのホテルでの宿泊では忘れ物がゼロだったそう

川口総合高校では、和歌山県が主催する体験交流型プログラム「ほんまもん体験」を取り入れた修学旅行を実施している。12年度で4回目。日中は、マグロの養殖体験や無人島探検、水族館飼育、まぐろの缶詰づくり、そしてカヌーなど主に海の産業やレジャーを、本格的に体験。そして夜は、3泊4日のうち、2泊を串本町にある一般農家、漁家に民泊。12年度は高2の生徒278人が計64戸に宿泊した。

体験学習や、多くの自然を目にする中で、何に対しても素直に感動するということ、感性を育んでもらうことと、民泊を通して知らない人と交流し、そこで「コミュニケーション能力を身につけてほしい」というのが、この体験型修学旅行の大きな目的だ。特に今回は、奉仕の心を養いたいという思いもあり、事前指導で何度も「積極的に手伝わうように」と伝えたい。

見知らぬ家庭で過ごすことに対して最初は緊張していても、すぐにそのお宅に馴染んでしまう生徒がほとんど。民泊先も「地域の子どもとして」を合言葉に、客としてではなく家族として受け入れてくれる。だから、食事の準備や片付けはもちろん、布団の上げ下げ、部屋の掃除なども

生徒は手伝わうことになっている。ある漁家では「夕食のおかずは自分で釣るもんだ」といつて、釣りにつれ出してくれたそう。夕食をとりながらの一家団欒では、串本の暮らしや苦労話などを聞くとともに、自分たちの生活や高校での活動について話す。それも非常に楽しいようで、この修学旅行をより有意義なものにしている。実際、1泊めでもう「帰りたくない。ここで暮らしたい」という生徒もいたほど。

事前学習の徹底と
教師間の共通認識が大切です

「一番気を使ったのは？」

事前学習の徹底です。特に民泊先での過ごし方や3泊めのホテルでの行動については再三注意を促しました。現地到着後すぐに民泊先との「対面式」があるのですが、その予行練習も行い、礼儀やマナーを徹底しました。各家庭に4人ずつ泊るのですが、出発前に「あの子と一緒は嫌だ。グループを変えてほしい」と言ってきたりする子がいます。でも、そういうわがままは許さないことも徹底しました。一人を許してしまつていつまでもグループが決まらない状態になってしまうのと、ぎくしゃくしながらもうまくやっていく協調性を育ててほしいからなんです。また、さまざまな注意事項があるのですが、教師によって言うことが異なる生徒も戸惑うので、教師同士で共通認識をもつよう心がけました。

なお、アレルギーをもっている生徒を把握するため、事前に食事に関するアンケート調査も実施しました。

実践のヒント

進路指導部 教師
小倉康之先生

民泊先の方々と別れる「解散式」では、泣いている生徒もたくさんいた。こうしたふれあいの経験が、将来を考える原動力になってくれればと期待しており、今後も民泊型修学旅行を続ける予定だ。

成長が実感できる体験活動

case.10

海外建築ボランティアで
高校生にできる
国際協力は何かを考える

滋賀県私立立命館守山高校

立命館守山高校では国際人育成のため、高3の夏に海外研修旅行を実施している。12年度はシドニー、バンクーバーでの語学研修、シカゴでのインターンシップ、タスマニアでの環境調査、バンコクでの国際ボランティアと5コースを設置し、生徒はそれぞれに参加した。

国際ボランティアコースは、国際NGO団体ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパンが世界における貧困層自立支援を指して展開する「海外建築ボランティアプログラム」を取り入れた。具体的には主に地元大工と共に家の建築を行うことに、異文化理解を深める活動などを加えた、独自のコースになっている。

「家を建てること」はあくまで手段。目的は「高校生にできる国際協力を実践すること。そのことを事前にどれだけ深く考えるかによって現地で得られる内容も大きく変わってくるため、事前学習は6回(1回4時間)実施。現地の自然や文化、習慣、歴史、社会制度に関する認識を深め、異文化理解を図った。ハビタットのスタッフによる講義も実施。また「なぜ東北の被災地では

School Data

1959年前身校創始、2006年立命館守山開校 / アカデメイアコース、フロンティアサイエンスコース / 生徒数904人(男子426人、女子478人) / 進路状況(2012年度実績) 大学98.3%、短大0.1%、専門学校0.3%、その他1.3%。



国際ボランティアコースに参加した生徒は26人。到着当初は戸惑っていた生徒も、次第に「言葉が使えなくても通じ合えるんだ」と理解し、現地の方々と積極的にコミュニケーションをとっていた。

なく、バンコクへ行くのか」という国際ボランティアの意義を考えるディスカッションも実施。最終的には、「困っている人を助けるのに国境線を引く必要があるのか」という問いを投げかけておくことで、問題意識をもつて研修に臨んでもらえるようにした。家の建築は柱と屋根しかない状態からスタート。生徒たちは一刻も早く完成させたいと作業に夢中になりがち。そこで毎夕食後にミーティングを行い、情報共有とともに「ここに住む人たちに本当に必要なものは何か」「自分たちが今築き上げているものは何か」を話し合うことで、目的を意識してもらうようにした。



スラム街にある幼稚園では、持参した絵本を寄贈。スラム街と自分たちが滞っているホテルとの差に愕然とする生徒も多かった。

また、途上国の現状を知るため、生活実態調査としてショッピングモールを見学したり、スラム街にある幼稚園も訪問した。生徒たちはスラム街の臭いや生活環境の悪さにはしばしば言葉を失っていた。しかし、これこそが現実であり、自分たちが向き合うべき課題だと認識し始めた。

事後学習は自分たちが現地で学び、考えた経験を広く伝える「表現力」を養うため、「JICAグローバル教育コンクール」への出品を課題とした。

実践のヒント

教諭 田辺記子先生

このコースは教師にとっても

国際協力実践の場になると確信

なぜハビタット・ジャパンの海外建築

プログラムを取り入れたのですか？

- ① 主催団体の信頼性 ② 研修地の治安
- ③ 活動内容の安全性 受け入れ態勢 ④ 内容の充実度の観点から検討してハビタット

生徒の日記より

- タイに来て、今までにない自分の感情に向き合えたし、新しい考え方に出会えた。たくさんの人に伝えきれない「ありがとう」が生まれた。本当にみんな無事笑顔で完成を迎えることができ、心から幸せです。
- 作業最終日。ホームオーナーさんに家をゆずって、「花は咲く」を歌い出した直後に涙が溢れた。人のために何かをしてそれがその人の夢を叶える行為だったということを実感できた嬉しさや感動と、もう会えないという思いがぐちゃぐちゃに混ざって出た、俺の中の新しい感情。悲しみではないけれど、こんな感情を10代で味わえたことに感謝したい。こんな体験をさせてくれたすべての人に感謝したい。

トに。さまざまなNGOや団体にメールで問い合わせた中で、最も高校生の成長を考えてくれました。また、建築という協働作業を通じ、互いを理解し合い、真の国際交流ができると思いました。

最も気を使ったのは？

ここで気づく力、行動する力を身につけてもらい、生徒たちの成長につながるという思いがあったので、毎日ミーティングを行い、自分たちでその日を振り返り、次に生かすことを考えてもらいました。生徒たちは実際よく考え、行動し、例えば、体調管理のためにすべきことも自分たちで気づいてくれました。

高3という自分の将来を考え、進路を決定する時期だからこそ、生徒たちは世界の課題と正面から向き合い、目の前の問題に取り組みながら、自分たちでさまざまな「視点」をつかんでくれました。その効果を実感できたことから、本校では今後も実践していく予定です。

JICA(国際協力機構)に問い合わせると、「グローバル教育コンクール2012受賞作品集」というDVDが入手可能。そこに田辺先生のこの海外研修レポートも収録されている。